The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	チンギス・カン画像の”興亡”：石濱文庫所蔵の満洲国モンゴル人向けカレンダーをめぐって
Author(s)	堤，一昭
Citation	石濱文庫の学際的研究 -大阪の漢学から世界の東洋学へ- 平成23年度大阪大学文学研究科 共同研究 研究成果報告書. 2012, p. 22-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100404
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

チンギス・カン画像の“興亡”

——石濱文庫所蔵の満洲国モンゴル人向けカレンダーをめぐって

堤　一昭（文学研究科・共生文明論）

1.　はじめに

今年度行った石濱文庫全体の所在調査で、未整理資料の中から2枚のカレンダー台紙が見つかった（図1，図3。どちらもサイズは縦51.5cm×横27cm）。おのおの以下のような文字が印刷されている。

◆図1：右下枠内に「新京　株式会社　青旗報社」。左下枠内はそのモンゴル語訳である(モンゴル文字で sin-e neislel qubi neilengsen köke tuγ sedgül-ün qorsiy-a)。中央下部の“めくり”部分は欠損していて、いつのものか分からない。

◆図3：中央上部にモンゴル文字でMongγol、中央下部の”めくり”部分の一番上の紙に「昭和十五年　新京　蒙古會館　東五馬路」、その下の台紙最下部に「新京　財團法人　蒙古會館　東五馬路」の文字と「蒙古會館」に対応するモンゴル語が見える。右側やや下部には「新京　財團法人　蒙民裕生會」の文字と対応するモンゴル語が、左側やや下部には「王爺廟　財團法人　蒙民厚生會」の文字と対応するモンゴル語が記されている。”めくり”部分は三ヶ月毎にまとめたカレンダーが印刷され、曜日名はモンゴル文字で、二十四節気や「四方拝」「放假」「元始祭」…「神嘗祭」「明治節」等の行事名は漢字で記されている。

これらの記載から、図1が満洲国の首都・新京の青旗報社のカレンダー、図3が同じく新京の蒙古会館の昭和十五年(1940)のカレンダーであることが分かる。青旗報社は、石濱文庫も所蔵するモンゴル語の新聞『Köke tuγ（青旗）』を発行していた新聞社として知られている。図1と図3を見比べると台紙の龍と雲が描かれた背景が全く同じであることから、年代不詳の図1も同じ昭和十五年(1940)かその前後の年のもので、どちらも満洲国でモンゴル人向けに政策的に作られたカレンダーと推測できる。

残念ながら、どちらも真ん中に描かれている絵についてのキャプションはない。逆にそれから、どちらも説明がいらないほど周知の画像だったのではないかと思われる[35]。後述するように、図1の中央に描かれるのは、実はモンゴル帝国の創始者チンギス・カンの画像である。現在、チンギス・カンの画像として周知のもの(図7,8,9)とは印象がずいぶん異なるし、今や専門家でも知る人は少ないだろう。だが20世紀前半には、少なくともこれらを含めて5つの系統のチンギス・カンの画像が“並立”していたのである。そして石濱文庫には、その5つに関わる資料が(間接も含めてだが)すべてそろっている[36]。

---

[35] 図3はタンカ(チベット仏画)風で、騎馬の武装した人物が中央に描かれ、左右に4つずつ同じ人物像が小さく描かれる。少なくとも満洲国の対モンゴル人政策として機能しうる図柄であろうが、同定は今後に期したい。

[36] 石濱が、師の内藤湖南の影響を受けて『元朝秘史』の研究を手がけ、大阪外国語学校蒙古語部で学び、モンゴル学関係の著作が30数点あることが背景にある。昭和13年(1938)

本報告では、5つの系統のチンギス・カンの画像にはどんなものがあったのか、それぞれの源流と流伝および時代背景、また相互の関係はどのようなものかを順に考察していく。最後に、チンギス・カンの画像の20世紀前半における意義は何だったのか、時代状況を考え、“並立”した5つの系統の画像の“興亡”をまとめてみたい。

2. 画像の5つの系統——源流と流伝、時代背景

A. 庫倫·慶寧寺の”写真”?系統の画像

図1「満洲国 新京 青旗報社のカレンダー」に描かれたのがチンギス・カンであることは、図4「成吉思汗之肖像」との図柄の一致によって分かる。図4は、大正13年(1924)に刊行された小谷部全一郎『成吉思汗ハ源義経也』[37](小谷部1924)の口絵である。キャプションには「成吉思汗之肖像/ 原図蒙古首府喇嘛総本山秘蔵/（図中の蒙古文字は大聖成吉思汗と訳す）」とあり、図の右上に一部欠けて「(yek)e mergen (čing)gis qayan」とペン書きらしき文字が見える。兜をかぶり、刀を背負って椅子に座った姿は、後でふれる『集史』などの挿絵に描かれる13〜14世紀のモンゴル人の姿とはまったく異なる。また面貌からは20世紀の人物(日本人か)が、扮装して写した写真のようにも見える[38]。ただ図1が、先行する図4と同一の画像をもとに彩色して描かれた絵画からの印刷であることは容易に想像がつく。

この画像が秘蔵されているという「蒙古首府喇嘛総本山」はどこなのか。大正10年7月、東京にあった蒙古協会出版部が発行した『蒙古写真帖』(細尾茂市1921：画像No.14)には、冒頭の大庫倫総理大臣ナムチンチヤロ王の写真に続いて、「慶寧寺所蔵の成義(ママ)思汗画像」が載る。室内の一隅の写真である材木を横組みにした壁(下部が一段分前に出ている)の左よりに木の柱が見え、その中ほどに小谷部著書の口絵と同じ画像が一枚ぽつんと貼られている。写真のキャプションには「慶寧寺所蔵の成義(ママ)思汗画像/ 成義(ママ)思汗の像は露國某人が種々の

には「新成吉思汗は」(講演録)、「近刊成吉思汗伝を読んで」といったチンギス・カンに関わるものも残している（石濱『東洋学の話』大阪、創元社、1943年所収）。

[37] この書は牽強付会に満ちてはいるものの、版を重ねて、現在でも根強い“源義経＝チンギス・カン”説の流布と、このチンギス・カン画像の認知に大きな影響を与えたと考えられる。冒頭に「賜天覧 賜台覧」、さらに徳川家達の揮毫などを麗々しく載せて権威付けまで図ってある。この書の社会的反響が大きかったのを懸念してだろうか、翌年に対抗して國史講習会編『成吉史汗非源義経』(雄山閣)が急遽出版されたほどであった。なお第二次大戦後、『世界の歴史6 宋と元』(中央公論社、1961年、pp.330-332「チンギス・ハーンは源義経か」)で宮崎市定は小谷部とその著書を批判的に紹介している。だが広く読まれ続けたこの概説書によって、この説は戦後にまで生き延びることになったのかも知れない。

[38] 小谷部はこの画像について、「私が蒙古の喇嘛教の総本山に秘蔵されて居る成吉思汗の肖像を見しに、之亦た色白にして細面なると、口は結んで居るが、口辺少しくふくれ気味なるは、前歯の出てゐるためであるとも想像される。此の肖像には茫々と顎髭を生して居るが、之は威を装ふ為の附髭なるが如く、優しき顔に不自然であると思はれた。」と書いている(小谷部1935:62)。画像の不自然さは感じていたようである。彼が著書を出版できたこと、さらには満洲国の成立後までも講演活動を続けられた政治的な背景については、考察を加える価値があるだろう。ちなみに彼は「代議士田中善立氏の御盡力で」『成吉思汗ハ源義経也』を出版できたと記している（小谷部1935:1)。

參考材料より擬して畫けるものにして庫倫の一寶畫なり」と記す。また写真帖には「外蒙庫倫慶寧寺」(キャプション「庫倫第一の大寺院にして毎月例日には必ず活佛の参詣ありと云ふ寫眞の左方建物は僧舎なり」)、さらに慶寧寺とおぼしき「喇嘛僧讀經の光景」(キャプション「喇嘛僧の讀經」)の写真も載る。

つまり図4の画像は、庫倫(クーロン、現在のウランバートル)の一番の大寺院の慶寧寺[39]にあった“ロシア人某が考証して描いたチンギス・カン像”だとされていることが分かる。ラマが読経している場所に比べて、この画像が貼られている一隅は飾り付けもなく貧相であり、この画像が大切にされ、崇拝されているようにはとても見えない。ただ少なくとも1921年時点で、日本人がこの画像をチンギス・カン像だと認識していたことは確認できる。この系統の画像で溯り得たのはここまでである。

当時の日本とモンゴルとの関係を考えると、1915年5月に日本が袁世凱政権と結んだ「南満洲及東部東蒙古に関する条約」で権益を得た東部内モンゴルに、日本の陸軍参謀本部はさっそく8月に調査団を派遣し、その経営を検討しはじめている(鈴木仁麗 2011:345)。またボグド・ハーン政権末期の外モンゴルについて、蒙古協会による『蒙古写真帖』が発行された。日本の満洲・モンゴル進出を正当化する機能も果たしただろう“源義経＝チンギス・カン”説を説く小谷部の著書が権威付けされて刊行された。こうした時代背景からも、この画像を「内モンゴルに進出した日本人によって創作されたもの」(楊海英 2011:112)とするのもうなづける[40]。確実に言えるのは、現在から見てどれだけ怪しげでも、この系統の画像が、1921～1940年頃にはチンギス・カンだとして通用して(させて?)いたことである。

B. 南薫殿蔵「元朝帝像」画冊系統の画像

1) 『元朝歴代帝后像』(1924年以前、北京　蒙文書社[41]) 所載画像について

石濱文庫の漢籍の部、新学部の一隅に『元朝歴代帝后像』と表紙に題する全13葉[42]の糸綴じの薄い写真帖がある(汪印侯(拍照)1924)。各葉、灰色の台紙には、上部に「北京蒙文書社蔵版」の文字を付す額縁のような枠が印刷され、その枠内に写真が貼られている。その第一葉が図2である。写真は中央部の四角い枠内に、チンギス・カンとして現在周知の画

---

39 『蒙古写真帖』(細尾茂市 1921：画像 No.15)の「外蒙庫倫慶寧寺」には、広場のむこうに門と堂宇が写っている。だが(松川 1998:58-70)に画像を載せる当時の寺院の形状には合致するものが見あたらない。ちなみにジェブツンダンバ一世、四世の遺骨が納められた寺院も「慶寧寺」だが(八宝 2011:46)、こちらは「喀爾喀北部の布隆汗山之南麓に在り」((釋) 妙舟 1935:42)と記されるように庫倫とは別の場所で、現在のアマルバヤスガラント Amarbayasgalant 寺院(http://www.amarbayasgalant.org/)のことであるようだ。庫倫第一の大寺院「慶寧寺」については、専家の示教を待ちたい。

40 楊海英 2011:112 の写真2は、本稿の図4とも若干異なり、この系統の画像が何種類かあったこともうかがえる。

41 この書は、中国では北京図書館、内蒙古自治区図書館、内蒙古語言文学歴史研究所図書室での所蔵は確認される(八省区蒙古語文工作協作小組辨公室 1979:)が、日本では稀覯に属するようである。

42 漢文のタイトルのみを順に記すと 1.元太祖皇帝、2.元太宗皇帝、3.元世祖皇帝、4.元成宗皇帝、5.元武宗皇帝、6.元仁宗皇帝、7.元文宗皇帝、8.元寧宗皇帝、9.世祖皇帝后、10.武宗皇帝后、11.仁宗皇帝后、12.明宗皇帝后、13.寧宗皇帝后。奥付には、発行者：蒙文書社、拍照(撮影の意)者：汪印侯、「甲子年(1924)十二月再版」などの記載がある。

像がある。漢文モンゴル文対照でキャプションが記されている(この部分も写真)。右側は上部に横書きで「元太祖皇帝」と題され、さらに漢文で「帝名鐵木真……」と略伝が記される。左側も上部に Boγda Činggis qaγan-u körüg (聖チンギス・カガンの肖像)と題し、下のモンゴル文は漢文と同内容だと思われる。奥付に「1924 年再版」とあり、それ以前の刊行が分かる。この写真帖の画像の直接の源は、次に述べる『中國歴代帝后像』と考えられる。

2) 『中國歴代帝后像』(年次不詳、上海、有正書局[43]) 所載画像について

「伏羲眞像」から「明熹宗皇后」まで全 116 枚の皇帝・皇后の画像の当時最新のコロタイプ印刷による画集である。画像の各ページに半透明の紙が挿まれ、それにキャプションが印刷されている。その 46 番目がチンギス・カンの画像である (図 7)。この画像が『元朝歴代帝后像』所載の図 2 の直接の源だとするのは、キャプションの文章が合致するからである。ただ両画像を比較すると、図 2 は単なる複写ではなく、帽子の質感の表現や表情などの加工が施されていると考えられる。これは『元朝歴代帝后像』のチンギス・カンのみの特徴で、他の画像は明らかに『中國歴代帝后像』からの複写と思われる。

『中國歴代帝后像』の顕著な特徴は、『元朝歴代帝后像』とも共通するが、第一に“帝后像”、つまり皇帝と皇后の画像双方が載せられていることである。特に『中國歴代帝后像』は各代の皇帝・皇后のペアを 1 セットにして載せるという方針が明らかである。さらに表紙タイトル、各皇帝・皇后のタイトルが漢文、英文の対照となっている点である。つまり、当時、君主のみならず夫妻ペア(さらには君主の家族)の肖像が通行していた欧米を強く意識した編集となっていると考えられる。

『中國歴代帝后像』の刊行(1915 年以後、1924 年以前と推定される[44])は、清朝が崩壊した後の中国において、欧米また自国にむけてその歴史の長さをアピールする、中国の nationalism が背景にあると考えられる。同様に、そこから「元朝」の部分を抽出してモンゴル文・漢文対照とした『元朝歴代帝后像』の刊行は、モンゴル人向け、モンゴルの nationalism 喚起が背景にあるといえよう。

3) 二つのチンギス・カン像の角逐ー『元朝歴代帝后像』と慶寧寺画像

注目すべきは、満洲国の対モンゴル人政策において『元朝歴代帝后像』と A.庫倫・慶寧寺の“写真”との二種のチンギス・カン像が併用されたと考えられることである。図 5 は満洲国の王爺廟に建設が構想された「成吉思汗廟全景」のポスターである[45](右上の年代は読み取りにくいが「康徳九年(1942)一月一日」と見える)。図の上部中央の画像は、髭などの表現

---

43 『中國歴代帝后像』の画像は、第二次大戦後も長く、概説書の挿絵の原画として用いられるなど影響力を持ち続けた。4)でふれる故宮博物院(台湾)現蔵の皇帝像などの、最新の印刷技術に基づく包括的な画集が出版されてこなかったことが背景にあるのだろう。

44 同じく有正書局による『前清十一朝皇帝眞像』(皇帝のみ)が 1915 年の刊行。装丁や内容、編集の充実度からして、それより後の刊行であろう。また北平の故宮博物院が 1929 年から刊行し始めた『清代帝后像』よりも図版の鮮明度が劣るため、印刷技術の進歩を考えれば、より以前と考えられる。また『元朝歴代帝后像』の再版 1924 年以前である。

45 Heissig1967:5。英訳の Heissig1966 にはこの図版はない。ドイツ語原著は未確認だが、日本語版のみに載る図版かも知れない。

から『元朝歴代帝后像』のチンギス・カン像に由来するものと考えられる。図1「満洲国　新京　青旗報社」のカレンダーが1940年前後と考えられるから、同時期といってよい。さらに図6は満洲国時期の西スニト旗のゲル内の仏壇の情景である(毎日新聞社1978:232)。仏壇脇の左側の写真?は、輪郭から辛うじて『元朝歴代帝后像』系統のチンギス・カン画像だと判断できる(A.庫倫・慶寧寺系統でない)。

1940年はすでに日中戦争期である。この時期以前からすでに、モンゴル人は民族結集のため、各政治勢力(蒙疆政権、国民政府、中国共産党など)はモンゴル人の指示を得るため、チンギス・カンの祭祀を競い合っていたことが、田中剛の研究により明らかにされている(田中剛2007)(同2009)。それによれば、チンギス・カン像(石膏像など彫像も含む)が崇拝の対象となる事例が、1930年「チンギス・ハン紀念大会」から1944年「成吉思汗廟」完成までの15年間に13例確認できる。それらにおいて用いられたチンギス・カン像は、二つの系統のチンギス・カン画像のどれだったのか、またはそれ以外だったのか、それらの併存や使い分けに何か政治的な意味があったのかの検討は、田中をはじめとする専家の研究を待ちたい。ただ、こうした動きを通して、この時期にようやく、画像も含めてチンギス・カンの認知度が高まり、一般にまで浸透したと考えられる[46]。

4) 南薫殿「元朝帝像」画冊ともう一つの「太祖皇帝像」をめぐって：

『元朝歴代帝后像』、『中國歴代帝后像』のチンギス・カン画像の源は、清朝の乾隆帝が乾隆12年(1747)に整備させて紫禁城の南薫殿に保管した「元朝帝像」画冊に載る「元太祖皇帝」像(図8)にある[47]。同時に整備された「元朝后像」「元朝后妃太子像」画冊も含めて、これらに載るモンゴル帝国の君主一族の画像が、製作されたであろう14世紀の大元ウルス時代にどのような状態であったかの詳細は未だ分からず[48]、確実に溯りうるのはここまでである。

南薫殿「元朝帝像」「元朝后像」「元朝后妃太子像」の画冊は、20世紀前半になって数奇な運命をたどることになった。国民政府が台湾に移るにあたって、絹本の「元朝帝像」「元朝后像」のみを携え、紙本が主体の「元朝后妃太子像」は残したのである。台湾と北京とで画冊が分蔵されることになった。中国の歴代の王朝・政権に伝来してきた文化財は、それを有することが中国の政権の「正統性」のあかしとなってきた。“元朝”については、中華人民共和国には、皇帝像を含まない「元朝后妃太子像」しか有さないことになった。そのためか早くも1953年には、或るモンゴル王家所蔵だったという「太祖皇帝像」(図9)を買い上げた。現在、中国国家博物館が所蔵し、「元朝后妃太子像」所載の画像とともに、中華人民共和国が展示品に

---

46 満洲国がモンゴル人中等教育のために1934年に設立した興蒙学院に在学した生徒が、ここで初めてチンギス・カンの名を覚えたと回想している(娜荷芽(ナヒヤ)2011:4)。13世紀のモンゴル帝国に始まるチンギス・カンの権威と神聖化(杉山正明2003)は、けっしてそのまま近現代モンゴルに直結はしていないのである。「八白宮」の霊柩によるチンギス・カンの祭祀は続いていたものの、この時期まで「大衆化」はしていなかったと見るべきだろう。

47 ドイツ展2005:303-311により「元朝帝像」「元朝后像」画冊の全貌が広く知られるようになったことは画期的である。なお堤一昭2008、および慶桂他1994:943-949；清・胡敬1816:下2b参照。

48 『元史』巻75祭祀志、神御殿には大都の寺院に設けられた各カアンとカトン(后妃)の画像を祀る「影堂」の記述がある。だがその画像は刺繍によるもので、現存の絹本、紙本の画像とは異なる。堤一昭2008参照。

ルとして、政治的に大きな機能を果たしていく。一方で、A. 庫倫・慶寧寺の"写真" ?系統の画像が、外モンゴルの庫倫の一寺院で見出され、B 系統の画像と対抗しながら、モンゴルの nationalism のシンボルとして用いられた。だが、おそらく日本の大陸進出を背景として生まれた A 系統の画像は、日本の敗戦とともに消滅することになった。

B 系統の画像の原画を所有することは、中国およびモンゴルの nationalism のシンボルを所有するという政治的な意義をも持っている。国民政府が台湾に移る際に「元朝帝像」などの原画などを携えた理由である。中華人民共和国が原画に近いチンギス・カン像を建国後早い時期に買い上げたのも、政治的な意義を考えたのかも知れない。なお満洲国での対モンゴル人政策において A、B の 2 系統の画像が併用されたのは、原画を敵国の国民政府が所有する A 系統の画像が使い難かった可能性もあるだろう。

20 世紀前半は前世紀に引き続いて、欧米の東洋学、モンゴル学の発展の時期でもあった。チンギス・カン個人やその相貌に対する関心も高まったと考えられる。その中でフランスや英国に所有される C.『集史』パリ本の挿絵ほかの画像が複製刊行されて、その需要に応えた。それらの図書はモンゴルや中国では広く流布せず、そこに載るチンギス・カン画像は個性に富まず、nationalism のシンボルとしては機能することはなかった。ただ美麗で状況描写に優れるため、カラー印刷技術の向上とともに現在まで概説書などに多用され、全体として画像の認知の度合いは B 系統に次いで高い。

D.の東方見聞録の挿絵の画像や E.『晩笑堂画伝』による画像は、B.系統の画像がなかなか広まらない状況で生まれた産物である。想像画としての特徴が強く、それゆえに広く支持されることなく、チンギス・カン画像としては流布し得なかった。

「チンギス・カンの画像」として、現在一番広く認知される B 系統の画像も、以上述べ来たった 20 世紀前半の“興亡”の中で勝ち残ったものといえる。石濱文庫所蔵の図 1、図 2、図 3 はその“興亡”の歴史のなかに位置づけてこそ、その価値が明らかになるのである。

****

文献一覧

◆A. 庫倫・慶寧寺の“写真”?系統の画像に関わる図書・資料

満洲国 新京 青旗報社のカレンダー（1940 年頃）：(大阪大学・石濱文庫蔵[未整理])

満洲国 新京 蒙古会館のカレンダー（1940 年）：(大阪大学・石濱文庫蔵 [未整理])

細尾茂市 1921：『蒙古写真帖』東京、蒙古協会出版部（国立国会図書館・近代デジタルライブラリー/館内限定公開）

小谷部全一郎 1924：『成吉思汗ハ源義経也』東京、冨山房(国立国会図書館・近代デジタルライブラリー)

小谷部全一郎 1935：『義経と満洲』東京、厚生閣書店

鈴木仁麗 2011：「内モンゴルと近代日本」早稲田大学モンゴル研究所編『モンゴル史研究 現状と展望』明石書店、pp.340-361

楊海英 2011：「モンゴルから見た清朝崩壊－民族自決と「革命」のあいだ」楊海英編『王朝から国民国家へ－清朝崩壊 100 年』勉誠出版、pp.109-130

松川節 1998：『図説モンゴル歴史紀行』河出書房新社
(釋) 妙舟 1935：『蒙藏佛教史』上海、上海佛學書局(大阪大学・石濱文庫蔵)
八宝 2011：「五世ジェブツンダンバの円寂とそのエルデニ・シャンゾドバの動き」『都市文化研究』13、pp.46-56

◆B. 南薫殿蔵「元朝帝像」画冊系統の画像に関わる図書・資料

汪印侯(拍照)1924：『元朝歴代帝后像』北京、蒙文書社(大阪大学・石濱文庫蔵)
八省区蒙古語文工作協作小組辨公室 1979：*Bügü ulus-un mongol qayčin nom-un yarčiy* /『全国蒙文古旧図書資料聯合目録』呼和浩特、内蒙古人民出版社
有正書局年次不詳：『中國歴代帝后像』上海、有正書局(京都大学・桑原文庫蔵)
有正書局 1915：『前清十一朝皇帝眞像』上海、有正書局(京都大学・桑原文庫蔵)
故宮博物院 1929-1931：『清代帝后像』北平、故宮博物院出版物発售室
Heissig1966：*A lost civilization：the Mongols rediscovered* / Walther Heissig; [translated from the German by D.J.S. Thomson] London ,Thames and Hudson, 271 p. , ill.
Heissig1967：『モンゴルの歴史と文化』(ワルター・ハイシッヒ著; 田中克彦訳) 東京、岩波書店 、355,6p.
毎日新聞社 1978：『別冊 一億人の昭和史 日本植民地史 2 満州』東京、毎日新聞社、出版企画センター編
田中剛 2007：「チンギス・ハン祭祀と日中戦争」『近きに在りて』51、pp.105-118
田中剛 2009：「成吉思汗廟の創建」『20 世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所附属現代中国センター研究報告、pp.113-139
娜荷芽(ナヒヤ)2011：「1930～40 年代におけるモンゴル人中等教育―国立興安学院を事例に―」2011 年度日本モンゴル学会秋季大会(於大阪大学)発表レジュメ
杉山正明 2003：「チンギス・カンのイメージ形成－時をこえた権威と神聖化への道程」『岩波講座 天皇と王権を考える』第 9 巻、東京、岩波書店、pp.271-301
ドイツ展 2005：*Dschingis Khan und seine Erben: Das Weltreich der Mongolen*, München：Hirmer, 432 p. (チンギス・カンとその後継者たち：モンゴルの世界帝国)
堤一昭 2008：「故宮南薫殿旧蔵の元朝帝后像についての予備的考察」『着衣する身体と女性の周縁化(平成 18～21 年度科学研究費基盤研究 A、研究代表者武田佐知子、平成 20 年度末中間成果報告[http://sites.google.com/site/bodycloth2/interim_reports] 15p.
慶桂他 1994：清・慶桂等編纂『國朝宮史續編』一百巻、北京、北京古籍出版社
清・胡敬 1816：『南薫殿圖像攷』二巻、嘉慶二十一年自序刊本(京都大学・桑原文庫蔵)
尚剛 2004：「蒙、元御容」『故宮博物院 院刊』2004-3(113)、pp.31-59,158 [この論文の存在については党宝海氏からご教示いただいた。]
NHK 取材班 1992：『大モンゴル 1 蒼い狼チンギス・ハーン』東京、角川書店
西澤他 2008：『中国・内モンゴル自治区博物館蔵 チンギス・ハーンとモンゴルの至宝展』図録、東京、東映

◆C. 『集史』パリ本の挿絵ほかの画像に関わる図書・資料

Blochet1911：*Djami el-Tévarikh = Histoire générale du monde* / par Fadl Allah Rashid

図１　満洲国 新京 青旗報社のカレンダー　（大阪大学外国学図書館石濱文庫蔵）

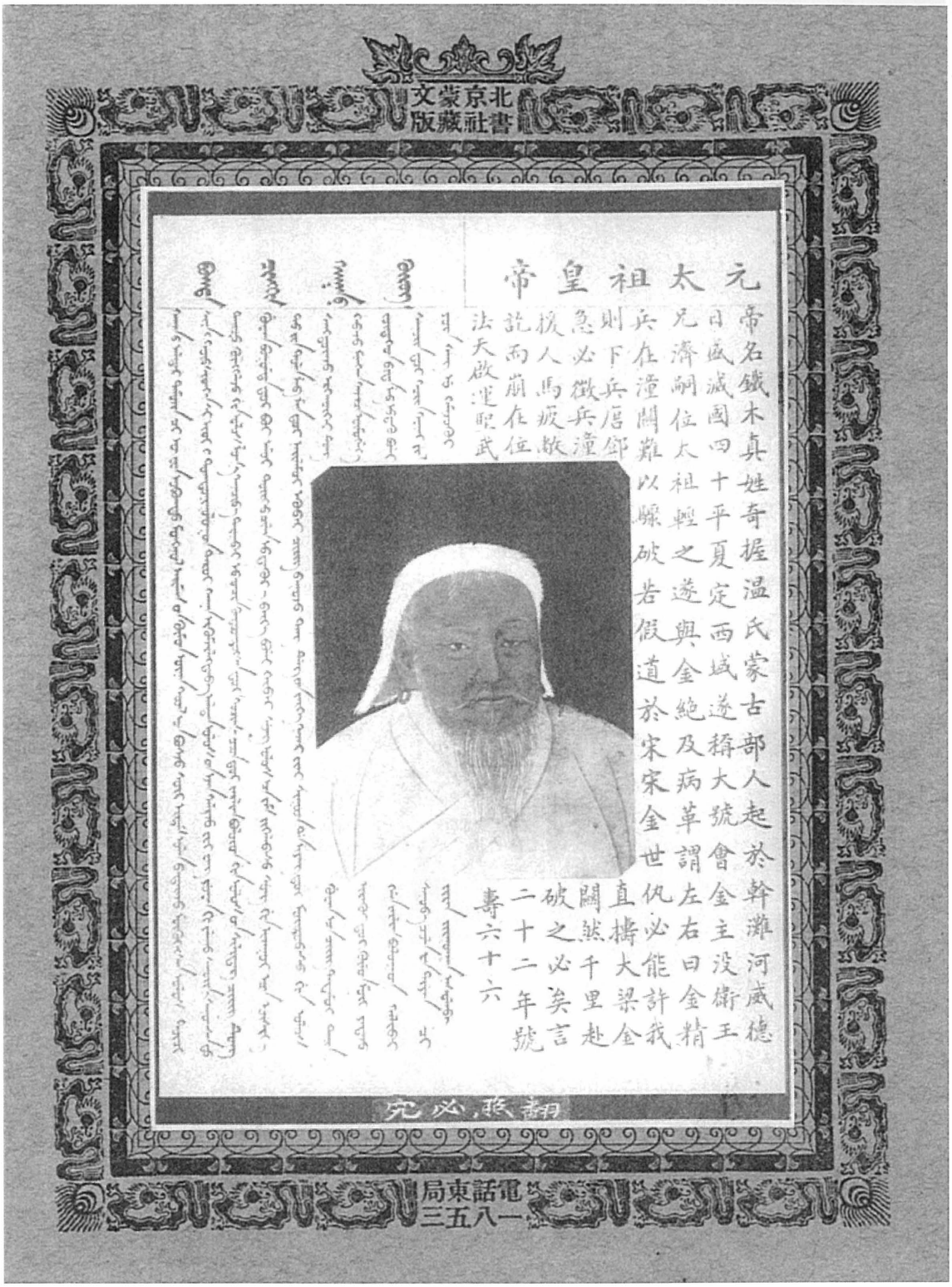
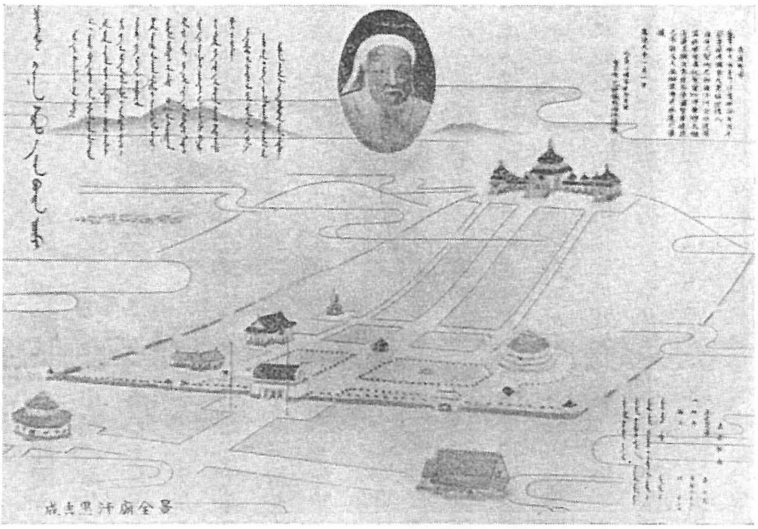


図２　『元朝歴代帝后像』の「元太祖皇帝」像　（大阪大学外国学図書館石濱文庫蔵）

図 3　満洲国 新京 蒙古会館のカレンダー
(昭和 15 年/1940 年)
(大阪大学外国学図書館石濱文庫蔵)

図 4　「成吉思汗之肖像」(小谷部『成吉思汗ハ源義経也』所収)



日本軍によるチンギス・ハーン廟建立の宣伝ポスター(著者蔵)

図 5　「成吉思汗廟全景」(ハイシッヒ『モンゴルの歴史と文化』所収)

図６　満洲国 西スニト旗 ゲル内の仏壇
左脇に立てかけられたチンギス・カン像

図７　『中國歴代帝后像』の「元太祖眞像」

図８　台湾故宮博物院所蔵の
「元太祖皇帝」像

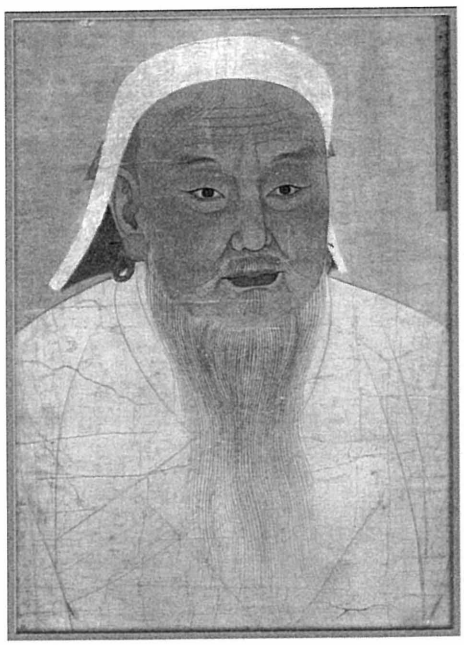


図９　中国国家博物館所蔵の
「太祖皇帝」像

図 10　台湾故宮博物院所蔵の
「元世祖皇帝」像

図 11　パリ国立図書館蔵写本『集史』
に載るチンギス像(その 1)

図 12　パリ国立図書館蔵写本『集史』
に載るチンギス像(その 2)

図 13　大英図書館蔵写本
Shāhanshā nāma に載る
ブハラでのチンギス像

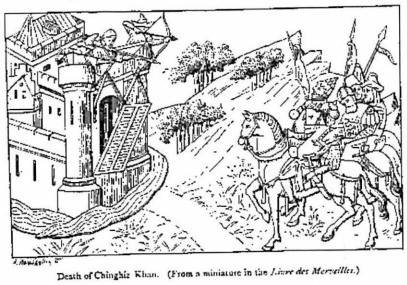


図 14　ユール,
The travels of Marco Polo に載る
チンギスの死の場面

図 15　パリ国立図書館蔵写本『驚異の書』に載る
チンギスの死の場面

図 16　ユック(Huc)の旅行記の
一つに載るチンギス像

図 17　清･上官周『晩笑堂画伝』の郭子興像